

# 花を褥

(大正七年寮歌)

松本五六君 作歌  
峰秀雄君 作曲

一

花を褥の草枕  
霞に暮るる野辺の春  
ローマの晨ナイルの夕べ  
栄華よあはれ夢の跡  
傾く月に猶心せず  
驕奢に酔ひし人々の  
惰睡を破る雄叫や  
健児義を取る北の国

二

世の敗類に神怒り  
南の洋に濤さわぎ  
腥風荒さび天日暗く  
欧亜の文華影消えぬ  
堯舜去りて妖雲霽れず  
江河氾濫れて未濁る  
暴虐無道幾年ぞ  
吾等立つべき時ぞ今

三

煙霞曠しき石狩の  
荒野に立ちて嘯けば  
霜枯れ吹雪く原始の森に  
エルゼの歌も微かなり  
手稲の嶺に夕陽淡く  
宇宙の神秘畏れみて  
雄々しき自然に育まれ  
雲呼び沖天に翼搏たん

四

春の女神の訪れに  
花は綻び鳥謡ひ  
翠の樹蔭に鈴蘭香り  
露の涼しき夏の朝  
時雨に漂ふ牧場の紅葉  
白雪晴るる冬の景  
書読む歳は豊平の  
時の流れに恵あり

五

薫る春風アカシヤの  
情操床しき若人が  
崇き希望の象徴と仰ぐ  
聖き北斗の瞬に  
真理の道の暗示を索め  
純しき玉の緒一百を  
一つに懸けて結びたる  
自治の基礎動きなし

六

烏兔流光の移ろひて  
昔の友は在はさねど  
十三年の光栄ある歴史  
護り伝へて極限無し  
自由の大旗正義の剣  
天下の民を済ふべし  
戦いの場の首途とて  
宴の盃いざ汲まん